

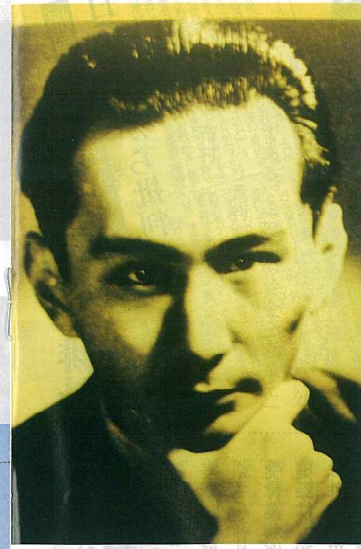
貴志康一を育んだ 水の風景

新山ひろし

名器ストラディヴァリウスの演奏者であり、若くしてベルリンフィルの指揮者としても成功した貴志康一。彼は今から100年前の、1909年3月31日午前11時30分頃、吹田市にある旧西尾邸で産声を上げた。そして、その部屋が今も「貴志康一誕生の間」として、そのままに残されている。生誕の気配が残る、この部屋から、貴志康一の彗星のような生涯にふれる旅に出てみたいと思う。

貴志康一の原風景

康一の母親カメは、西尾家の娘で、メリヤスで財をなした貴志家に嫁入りし、当時の習慣通り、実家で長



ばくが訪れた5月の初め、旧西尾邸には鯉のぼりがひらめいていた。康一という男の子の誕生を祝う大いなる拍手を聴こえたという。

康一の園内デビューは16歳の時だった

2009年5月17日、大阪心斎橋の三木楽器で「貴志康一誕生100年記念コンサート」が開催された。この三木楽器の音楽ホールは、大正14年5月17日、貴志康一16歳の時、ヴァイオリン二ストとしてのデビューを果たした場所である。その日付も曲目も同じという粋な企画である。一曲目は、その時と同じシューベルトのソナチネ。後半には康一作曲の「花見」も演奏される。当日、ヴァイオリンを演奏するのは16歳の天才ヴァイオリニスト三浦文彰さん。

貴志康一は28歳で死んだ

数々の成功をおさめた貴志康一は、盲腸をこじらせて昭和12年11月17日午後4時5分、阪大病院で死去する。28歳だった。病院の跡とされる場所に立つと、前に大川の下流である室島川が流れている。死を前にして彼は川のせせらぎの響きを感じ取っていたのだろうか。

カメ

● 出西尾家住宅「吹田文化創造交流館」
● 中尾学園「貴志康一記念室」
● 都島区役所広域課
● 都島区役所刊



「康一生誕の間」カブトとよろいが置かれている。康一少年もきつとこんなものを身につけてたろう

間動き：あるいは、ヴァイオリンが水の流れとなり、ピアノが人の感情とも聴こえてくる。「花見」では、ヴァイオリンの弦を指ではじく音が軽やかな水のしぶきに思えた。「水と人の戯れ」その中に貴志康一の原風景がありありと現れてきた。この84年前の三木楽器でのコンサートでの成功で、康一はスイスへの音楽留学を決意することとなったのである。



甲南学園「貴志康一記念室」貴重なアルバム類におとろいた。貴志康一のCDも手に入る。

当時としては、写真がよく残っている。まるで、親類の家でアルバムを見せてもらっているような気持ちになつてしまつていた。さて、それからの康一。甲南学園の冊子「貴志康一」によれば「6年生の時、初来日したミッシェル・エルマンのヴァイオリンに魅せられるようになる。そして、ついに音楽で身を立てることを決意して大正15年12月、17歳の時、高等科を中退して、スイスのジュネーブ国立音楽院へ留学した。」とある。ジュネーブは美しいレマン湖の畔。水に縁のある貴志康一にいかにも似合っている。留学は3度にわたり約6年半、スイス、ドイツで過ごし、フェルトヘンクラーに師事し、ベルリンフィルを指揮して自作を発表するというピークを迎える。

男を産んだ。康一を出産したとき、カメは21歳、元気で明るい性格であり、後に康一も含めて「二男六女」の母となつてゆく。さて、一か月ほど西尾邸で過ごし、カメは康一を連れて網島にあった広大な貴志邸に帰つた。その場所は、近松門左衛門の「心中天の網島」の舞台であり、今、太閤園の隣にあたる。前をゆつたりと大川が流れ、その川向こうに造幣局がある。康一は後年、自伝小説「恋」に「花見の客、お酒呑み、出稼ぎの店、舞子、芸者、巡查、子供……なかなかの賑わいだ。それが又子供の自分には楽しみで春の盛りをやつてくるのを待っている。れたものだ」と書いている。当時、大川は川漁が盛んで、朝早く、川船の水音や漁師の掛け声などが貴志邸から聴こえたという。

康一が小さい頃、カメと週末は、吹田の西尾邸でよく過ごしたという。西尾邸からはすぐ側に神崎川の土手が見える。当時、神崎川の水はとでもきれいだった。きつと、康一は水遊びをして遊んだらう。その頃、女学生の時にヴァイオリンを学んだことがあるカメは、演奏して康一に聴かせたという。さて、1919年(大正8)、康一が5年生になった頃、貴志家は海の側の芦屋に家を持つことになる。網島の家の東は砲兵工廠、西は造幣局で辺りは工業地帯となり、煙が充満した。父、奈良一郎は子供たちが海水浴という西洋伝来の健康法を実践できるよう芦屋派という場所を選んだ。西尾家11



網島の旧貴志邸跡 銀橋より撮影。広大な邸宅だった「心中天の網島」の場所でもある